



ごみ非常事態宣言 5年目の東京小金井市

市民が東奔西走……



待たれる

『生ごみの減容処理HDM方式』の 実証実験へ！

進展しない小金井市のごみ処理問題

「日本最古」の枕詞がついていた東京小金井市の二枚橋焼却場（1958年焼却業務開始）は、2007年3月、49年の長い歴史を閉じました。この間、建て替えを巡っては、二枚橋衛生組合事務局から「施設建て替え」提案が出されましたが、構成市（小金井市・府中市・調布市）で検討した結果、経済性や効率性の面から実現は困難であるという結論に至りました。すでに1993年には府中市が多摩川衛生組合（稲城市）に加入、調布市は1999年、三鷹市と「新ごみ処理施設整備に関する覚書」を締結し、2013年4月からの稼働を目指し焼却炉建設工事に入っています。

残された小金井市は、2004年から都の指導で隣接した国分寺市との共同処理を模索してきたものの、新焼却炉建設候補地とされる3市にまたがる二枚橋焼却場跡地を取得できず、いまだに膠着した状況が続き、ごみの焼却を多摩地域間の広域支援に頼ってきました。

現在、焼却施設の建設用地を巡っては、表面的には“一ミリも進んでいない状況（市民談）”で、2006年10月に出された「ごみ非常事態宣言」は、現在も継続中です。このため、市が毎年行っている無作為抽出の市民アンケート調査の「市政に望む重点項目」では、「ごみ対策」が4年連続“不動の1位”となっています。

一方、小金井市は、このようにお尻に火がついている状況なので当然の結果ですが、あらゆるごみ減量施策を展開し、環境省が実施している「全国の3Rの取組み」調査では、ごみ量の少ない自治体、リサイクル率の高い自治体の上位10位に毎年常連で登場する先進自治体でもあります。

最近の動きなどを、小金井市民のお二人に伺いました。



しずか
市原賤香さん

トンボの会
生ごみ減量HDMテストを推進する会



のりみち
加藤了教さん

HDM導入検討会

市民も東奔西走しつつ…着目したHDM



国分寺市との約束で、昨年2月中には清掃工場の建設場所を決定することになっていたと思いますが、結局それはどうなったんですか？



昨年4月に「二枚橋跡地に建てる」と行政府決定しましたが、敷地の一部が調布市にまたがっており、調布市は反対しています。

調布市にしてみれば、三鷹市との共同処理場を調布市内に建設中で、市内に2ヶ所もごみ焼却施設を持つわけにはいかない、ということだと思います。



八方ふさがりの状態なんですね。市民としてどう感じていますか？



この問題は腫れ物にさわるといえるような、デリケートな政治問題でもありますから、調布市が賛成してくれないと無理でしょう。

一方、二枚橋周辺住民には焼却反対の強い住民運動があります。それで、ごみに関わって活動してきた私たちとしては、何とか焼却に代わる新技術がないものかと、検討を重ねてきました。



精力的に見学会や学習会などをされてましたよね。



はい。技術的にはいろいろとあるんですが、その中でも、いま推進できる技術として『生ごみ減容処理 HDM 方式』(*)に着目しました。

この技術は、木屑のチップに好気性微生物 12 種類を添加し、そこに生ごみを投入して混合攪拌させると、24 時間でほぼ 90%、最終的には 98%~99%が水と気体（炭酸ガスと窒素ガス）に分解する、というものです。

*ごみっと・SUN 76号、79号に掲載

陳情が満場一致で採択された！



この件では市議会に陳情も出されましたよね。陳情内容も詳しく教えてください。



2010年3月の小金井市議会に「生ごみ減量のため『生ごみ減容処理 HDM 方式』の実証実験を行うことについて」の陳情を提出したのですが、これが思いもかけず、全会一致で採択になりました。

陳情内容は…

ごみ減量が早急に求められており、抜本的な行政レベルの方策が必要、その手段として HDM 方式の実証実験を求めたものです。H21 年度から埼玉県久喜宮代衛生組合で採用している HDM 方式は、次の点で優れているとしました。

- ① 初期費用やランニングコストが低く、安全である
- ② 必要とする面積が比較的少なくすむ
- ③ 有毒ガス、ダイオキシン、煙が出ない
- ④ 悪臭や騒音をほとんど伴わない
- ⑤ 生成物がない（消滅してしまう。堆肥として使うことも可）
- ⑥ 排水処理の必要がない
- ⑦ 地方自治体での優れた実績がある

いよいよこれからが正念場



採択された後は、どのようになりましたか？



市民側は「生ごみ減量 HDM テストを推進する会」（代表・大橋元明氏）を立ち上げ、市のごみ対策課と協議を重ねているところです。実証実験の場所や、建物様式、モニター世帯のごみ収集などについて検討中です。



朝霞市にある施設の見学には、ごみからも参加させてもらいましたが、「ごみっと・SUN79号に掲載」小金井市の街中で、実証実験ができそうですか？



市民側とごみ対策課による協議会は、名称を「HDM 導入検討会」とし、1月からは2週間に1回の会合を持つことになりました。

1月中に建物様式の決定（テントかプレハブか）、コスト計算、見積りの作成を行い、その後は、場所の確定、補正予算案作成、周辺住民への説明会の開催、詳細設計図作成、建築確認申請、とスケジュールに沿って詰めていくことになっています。これからが正念場です。



表紙イラストの猫野へすかさより=人気の理家カノウニコさんの料理本「やさしいのかみさま」幸せになるための40のレシピに
たくさん野菜を中心とするカットを掲載。定価1365円、1月31日に小学館から発売されます。



やっとそこまできた、というわけですね！
小金井市の場合、もともとのごみ量が少なくて、雑紙の分別も進んでいますから、生ごみが何とかできたら、新しい焼却場を持つまでもないのでは？



21年度データでは、燃やすごみは年間15,052 t、1人1日あたり358gです。今年度はさらに減少して14,600 tと仮定し、そのうちの55.9%が生ごみ（組成分析調査より）とすると、計算上では280日稼働で30 t / 日のHDM処理が必要となります(8,161 t ÷ 280日 = 29.1 t / 日)。その際、剪定枝94 t / 年はHDMの菌床にできますから、生ごみ以外の可燃ごみは6,439 tになります。さらに分別を徹底して1割の雑紙を資源化できたとすると、残りは日量16 t / 日なので、炭素化処理が可能です。



そこで生ごみのHDM処理が導入できるかどうか、まずは実証実験で確認するというわけですね。多摩地域では、モデル地域での生ごみ分別収集を、小平市が昨年7月から開始し、立川市でも今年2月から550世帯の回収が始まるそうです。回収後は両市とも市外での堆肥化なので、小金井市のHDM処理実証実験がスタートすると、かなり注目を集めるでしょうね。その意味でも、この実証実験がスタートできるようがんばってください！

.....*.....*.....*.....*
焼却施設問題を巡る長年の小金井市の苦悩は、市民側も同様で、実践はもちろんのこと、対案について専門家以上に研究し、データをもとに粘り強い働きかけをしてきたことが、全会一致の陳情の採択に結びついたのでしょうか。ごみかんで、これからも、小金井市のこの新しい動きを追いかけていきたいと思います。ご意見やご要望などをお寄せください。

ドイツ生活記

長野県の実家で、14年ぶりに日本のお正月を味わってきました。夫と明にとっては初めてのお正月。明は、日本語のわからない夫の通訳係もしました。12月に2週間、夏に通った幼稚園に入れてもらいました。明のことを憶えてくれたお友達もいて、うれしい限り。物を取りあったり譲り合ったりして遊び、「おもちゃのチャチャチャ」を歌って周りをびくりさせたり、ほっぺにチューして先生を喜ばせたりもしました。給食を残さず食べ、クリスマス会やお店屋さんごっこも楽しみました。

おもちが苦手ですが、納豆と干し柿は大好き。初詣には善光寺にでかけ、人ごみを歩き、お賽銭を投げ、お坊さんを観察。警備の方が丁寧なものも日本らしいです。

寒い足をしてこたつにもぐりこみ「気持ちいいね」と目を細める。「どんぐりころころ」を歌いながら、お池にはまったどんぐりに「僕が迎えに行くから大丈夫、待っててね」と必死で呼びかけている。自然保育の会では森でツルを集めてリースを作り、熊汁を食べました。お年玉をもらったり、屋台のタイヤキを食べたり、小学生2,3年生のいとこのうちにひとりでお泊りしたりと、初めての体験がいっぱいでした。

日本にいる1カ月の間に、日本の童謡が間違わずに歌えるようになり、聞いた言葉をそのまま反復できるようになりました。わけはわからなくても、意味は後からついてくる。2歳半のころはドイツ語、ギリシア語、日本語を混ぜてしゃべっていましたが、3歳3ヶ月の今は混在せず使い分けています。

ドイツに戻ってからの口癖は「おばあちゃんのところ、明日行こうね」
日本がよっぽど楽しかったみたいです。

田口理穂 ごみかンドイツ特派員



自然保育の会で森にでかけました